William Blake の詩に現れた Divine Image への一考察

吉田道子

1

一粒の砂に一世界を一輪の野花に天国を見た William Blake は豊かな想像力の持主であつた。この想像力は彼の心に宿る幻覚的色彩を帯びた深い洞察力と鋭い直感が、詩的天才と相俟つてもたらされたものであつて、この感性が、赤裸々な自然と觸れ合う時、おのずから彼の心にそのイメージを描き出すのである。この想像力によつて、Blake は野の片隅に咲く一木一草にも、眼に見えぬ程の小さな虫けらにも各々喜びがあり、亦使命があることを感じ得り、自然界の神秘に打たれ、其処に秘められた神の存在を感じたのである。斯て自然界に神の映像を認めた Blake は、有らゆる物象はやがて聖淨化されて高貴な所に達し、永遠性を与えられると云う信念を持つに至るのである。斯くの如く万物に神聖を感じ神の遍在を感じた詩人は、神の讃美、生の歓喜、神の愛の喜びの歌を歌わずには居られなかつた。この歓喜は Songs of Innocence と The Book of Thel を通して、萬物を創造する神は永遠の存在であり、その恵は有らゆる物象に及び、すべての物の中一つとして神の姿を宿さないものはなく、神の存在は正義、喜、愛と平和、を齎すのである。と云う思想となつて示されている。従つて初期のこれらの作品は全篇を通じて（一例外を除く）森羅万象に宿る神の image を喜び称える明るい調子で描かれている。

然るに Blake の想像力、即ち彼自身の表現による (1) Poetic Genius は草、木、風、雲等自然界の凡ての

物象を、外形からばかりではなく心の内なる世界に見ようとし、やがてそれを心の現象の凡てと一致させるに到るのである。即ち草木に神の諸相を見た彼の感性は、草木に人生の諸相の象徴を、各々の草木に各々の人生の相の象徴を、鳥、獣石に至る迄の凡ゆる物に人生の或る相の象徴を見るのである。斯く自然のさまざまな層に人生と人間の形を捕え得た Blake の詩感は、従前の神の讃美と自然への驚異より進んで、自然と人間の心に渡された絆の深さに思を到し、その背後に潜む底知れぬ神秘性と魅力に、眼を向けるのである。

従つて Songs of Experience や The Marriage of Heaven and Hell に見られる神の姿は、初期の作品に示された倫理的な存在に代り、神秘的な傾向を帯びた象徴主義的な存在となり、以前の明朗さに代つて蔭影と神秘の色が濃くなつている。

やがて Milton, Jerusalem に至ると、神秘的な詩的想像は内攻的となり、ひたすら人間性の探究へと向けられている。ここに到るとこれまで汎神論的であつた作者の神観念は稍キリスト教的色彩を帯びて来る。即ち人間性の完成には人間相互の自己犠牲が必要とされ、人間が自己の想像力に忠実である限りに於て、想像の世界は永劫の世界に通じ、永劫の世界に生きることは、即ちキリストの中に生きることである。依て Blake はキリストを模範として、且詩人として自己の内なる詩的想像に忠実に生きようと努力する姿が認められるのである。

以上は Blake の作品中、同時代、同思想のもとに書かれたと思われる作品を段階に分けて対照とし、そこに示された Divine Image を概略的に述べて来たのであるが、余りにも広く深く亦色彩に豊んだ彼の思想の凡てを知り得ることは困難である。此処ではその中、汎神論的思想が彼の持つ詩的天才によつて統一され、調和されたものの跡を辿り、Blake の描いた神への image を探つて行きたいと思う。

註 (1) The Marrriage of Heaven and Hell P. 252

Jerusadem P. 404

2

Songs of Innocence と Book of Thel に示された Divine Image について、

Songs of Innocence で Blake は神の姿を無心な子供の世界を通して描いているが、その中心思想は Divine Image によく窺われる。

For Mercy, Pity, Peace, and Love
Is God, our Father dear
And Mercy, Pity, Peace, and Love
Is man, His child and care.

And all must love the human form,
In heathen, Turk, or Jew;
Where Mercy, Love, and Pity dwell
There God is dwelleig too. (P. 75)

(慈悲と情と平和と愛
それこそ我らの父なる神

慈悲と情と平和と愛
それこそ神の子、いとし児なる人
凡ての人を愛しなさい、人の姿をした人を
それが異教徒でもトルコ人でも又ユダヤ人でも
慈悲と愛と情の住む所には
神も亦住み給うから)

Blake は凡ゆるものの本質は慈悲、情、平和と愛であり、人はその愛と美に於て神聖に近ずくものである。又神は己を仔羊にも、幼児にも亦花にもなぞらえ、常に彼等と俱にあり、朝には慰めを、昼には喜びを与える方であると述べ、The Lamb でも次のように云つている。

Little Lamb, I'll tell thee,
Little Lamb, I'll tell thee:
He is called by the name,
For He calls Himself a Lamb.
He is meek, and He is mild;
He became a little child.
I a child, and thou a lamb,
We are called by His name.
Little Lamb, God bless thee!
Little Lamb, God bless thee! (P. 67)

（仔羊よ教えてあげよう
仔羊よ教えてあげよう
その方はよばれる　お前と同じ名で
その方は御自分を　仔羊と云われたので
その方は柔和な御方、またやさしい御方
その方は幼児になられて、こう云われた
私はおさな児　そして　お前は仔羊
私達はよばれる、その御方と同じ名前で
仔羊よ　神がお前を祝福して下さるのだ
仔羊よ　神がお前を祝福して下さるのだ）

亦 A Cradle Song では母さんのため、坊やのため、皆んなのために幼児になられた方、その方のほほえみは幼児のほほえみで、その方は和ぎの方であると歌つている。The Blossoms では可愛い駒鳥の啜泣を聞いてくれる幸福の花に、Night では一つ一つの蕾に、一輪の花に、あぶなげな巣に眠る小鳥に、野獣の洞穴の一つ一つに、尽きることのない喜と恵を注いで廻る天使に準へ、その優しさは恐しい荒びた獅子の心を和げ、そのすこやかさは獅子の病を取り去り、猛き獅子を仔羊の如くにし給うと歌つている。The Little Black Boy では

'Look on the rising sun, — there God does live,
And gives His light, and gives His heat away;
And flowers and trees and beasts and men receive
Comfort in morning, joy in the noonday. (P. 68)

（ごらんよ坊や、おひさまがのぼるよ
あそこに神様がいらつしやるの
光と暖かさを　わけて下さり
花も木も　そしてけものも人も
朝には慰め昼には喜を与えられるの）

このお父様は更に私達が太陽の暑さに耐えられるようになる迄、庇い愛して下さると云い、The Chimney Sweeperでも And the Angel told Tom, if he'll be a good boy, He'd have God for his father, and never want joy. (P. 74) (そして天使がトムに云うには、よい子になれば神様がお父さんになつて下さり、喜びはつきることがない）と歌つている。

更に神の慈悲に言及し、道に迷つた小さな子供の側にも神は何時も共に居給い、私達の悲しみが一つでも残つている間、私達の側で共に歎き給う（The Little Boy Found, P. 79）と歌い、亦 On Another's Sorraw でも次のように云つている。

O ! He gives to us His joy
That our grief He may destroy
Till our grief is fled and gone
He doth sit by us and moan. (P. 79)

以上に見られる如く Songs of Innocence に歌われている神の image は倫理的な存在、普遍的な存在として明確に捕えられている。然しこの存在は Blake にあつては普遍的であると同時に特殊な存在であつて、それは神性であると同時に人間性を持つ神としての存在である。此処に於て優しい父、天使、羊飼、小鳥、花と

しての愛の神の姿は、凡ゆるもの、極く平凡な物の中にも等しく見出し得る光と喜の源である、と云う思想が理解されるのである。亦彼はこの世界を lower Paradise と呼び、其処では獅子は仔羊と共に眠り、愛の天使達は常に寂しき者の側に居て慰めと和ぎを与えると述べている。Songs of Innocence の世界では The Chimney Sweeper を除いて、死、苦痛、残酷さは神の愛の前に影をひそめ、其処にあるものは清純な喜びの歌声である。従つて此処に歌われている悲哀と困難は、苦悩そのものの為に存在すると云うよりはむしろ神の慈悲の強調の為にあると思われる。此処に於て Songs of Innocence に示された Blake の愛の神としてのモチーフは聊かも乱れを見せていない。

此処で Blake の神について考えてみる。Blake は自然界を作りその被造物に等しく愛と恵を与え、喜びには祝福を、悲しみには慰めを与える存在を父なる神と呼び、キリストを神のいとし児と呼び、土塊にも使命が与えられていると考えている。然し神の創造物一つ一つに神の遍在を認めている点、又これと矛盾するものを含んでいる点は、彼の神観念が強力な一つの信念に基いていると断定出来ない所以である。その中には純粋ではないまでも多分にキリスト教的なものが含まれているが、そればかりでは彼の思想は理解しきれない。ここに彼の内なる感性、即ち詩人としての想像力が大きな場を占めていることが窺われる。前にも述べたように彼の想像力は非凡であり、その洞察は深く鋭い。これが詩人をして自然の姿に驚異と憧憬を感じさせるのであり、それが神聖さを感ぜしめるのである。従つて Blake の云う Divine Image は彼の詩的天才が齎した愛の幻影であつて、生きとし生けるものに生気を与える理想化された存在なのである。此処に於てこの image が汎神論的な傾向を帯び、亦汎神論に通ずる所以でもある。つまり或る限定された、或は単一な信念から生ずるものではなく、諸々の要素と豊かにして鋭い感性が良く調和された結果として生じた独自の思想であると、云

事が云えよう。

次に The Book of Thel について云えば、Songs of Innocence に見られる汎神論的な神の姿はこの書でも統一を保つて示されている。この書では神は一日で萎れる花も、又頼りない虫も、鈍い土塊をも愛し、それ等は互に他を愛し又他に自己を与えることに生命の意義を見出している、と次の様に歌つている。

Saying, "Rejoice, thou humble grass, thou new-born lily-flower,
Thou gentle maid of silent valleys and of modest brooks;
For thou shalt be clothéd in light, and feel with morning manna,
Till summer's heat melts thee beside the fountains and the springs,
To flourish in eternal vales." (P. 242)

(神述べ給う、喜べよ汝いやしき草、汝咲きそめし百合よ、
汝沈黙の谷の優しきおとめよ、つつましく流れる小川のおとめよ、
栄光に包まれ、マナにて養われんために
夏の暑さが汝を溶かし、泉の水を涸すまで
とこしえの谷間に栄えんために。)

Everything that lives
Lives not alone nor for itself. (P. 243)

(生きとし生けるすべてのものは
一人で世にあるのでも、又己のためにのみ生きているのでもない)

Blake はこの書では普遍的な愛の中に融合された人間的な情意を以てキリストとし、キリストは神聖な人間

性を持つ存在であり又人類の理想、精神的光明としての太陽である、と考えている。

3

Songs of Experience に現れた象徴主義的な神

Songs of Innocence で明解な神の姿を描いた Blake の中心興味は Songs of Experience に至り永遠なる世界の影としての現実世界の肯定へと変り、前者の喜びの歌は、やがて移つた幻想的信念に写る世界の解説の歌と変つている。Songs of Innocence の愛と平和の明るい世界は嫉妬、疑惑、僞善と虚僞の世界に代り、其処では愛は二つの姿を持ち—自己を省りみず他に安らかさを与えんとする愛と、自己の慾望の為に他を犠牲にしようとする愛—二相の愛の相克が見られる。The Clod and the Pebble では人間の心に宿るこの愛の二相を次の様に疑惑の眼で見つめている。

'Love seeketh not itself to please,
Nor for itself hath any care,
But for another gives its ease,
And builds a Heaven in Hell's despair.'

'Love seeketh only self to please,
To find another to its delight,

Joys in another's loss of ease,
And builds a Hell in Heaven's despite.' (P. 92)

(愛は慾を満さうとはせず
おのれのことを気にかけず
他の者に安らぎを与え
地獄の絶望の中に天国を作る

愛はただ慾を遂げようとし
他を己れの楽しみの犠牲とする
喜は他のものの安らかさを奪い
天国を踏みにぢつて地獄を作る)

Songs of Innocence の Nurse's Song で岡の上で無邪気に笑いさざめいている子供の声を聞いては喜び、目が暮れて安らかな眠りにつかせようと Come, come, leave of play, and let us away (P. 72) と子供達を呼び戻す優しい乳母は、Songs of Experience では

When the voices of children are heard on the green
And whisp'rings are in the dale,
The day of my youth rise fresh in my mind,
My face turns green and pale.

Then come home, my children, the sun is gone down,

And the dews of night arise;
Your spring and your day are wasted in play,
And your winter and night in disquise. (P. 83)

（子供の声野辺に聞えるとき
ささやきの声谷間に洩れるとき
私の若かつた日が新らしく想いいだされて
私の顔は青ざめる。

さあお帰りよ、子供達よ、日は暮れ
夜霧が下りようとしている
お前達の春と昼とは遊びに費され
冬と夜とは真似事に費される）

と云うこの乳母は、子供達に遊ぶ事を禁じ、若い日々を遊んで過すことを責めて彼等に善悪を知るための勉強を無理強いにする乳母である。亦夜の森に輝き燃える眼をした虎は、すべての僞善や虚僞を打ち破る憤りの愛の象徴として描かれている。

更に holy なる語も二様の意味を持つに至つている。即ち靈肉の分裂した状態又は善悪が対立した状態に於て holy は非人情的な、人間性を失つた神性を意味し、そこでは holy は慈悲と対立する。従つて holy を慈悲との対立に於て考えた時、現実の世界に聖なるものは有り得ないのであつて、A Little Boy Lost に於る holy はこの意味で用いられている

And standing on the altar high,
Lo! what a fiend is here,' said he
'One who sets reason up for judge
Of our most holy mystery.' (P. 99)

次に靈肉一致の状態、亦愛と赦しの支配する理想の世界に於る holy は「無邪気」を意味し、この意味で A Little Girl Lost は歌われている

In the Age of Gold,
Free from winter's cold,
Youth and maiden bright
To the holy light
Naked in the sunny beams delight. (P. 103)

以上 Songs of Experience を通して感じられるものは Blake の神の愛の存在への疑惑と動搖である。万物に示された神の恵の面のみを強調して善びの歌を歌つた詩人は、神の手になる虎の姿の中に邪悪なものを許すまいとする険しさを感じ、愛の峻厳さを覚えると同時に、自己の為にのみ、他人の為にのみあらんとする愛の矛盾する姿を見出して動搖し、次第に懐疑的となる、従つて悪の意識の芽生えと共に、その作品には蔭影の面が濃くなり、拘束的なものへの反抗の声が強くなり、その描写にあたつては象徴的な傾向が強まつて来ている。

4

予言書

a. Marriage of Heaven and Hell.

Marriage of Heaven and Hell は彼の予言書と称するものの第一前提ともなるべきものであるが、象徴主義的傾向を帯びた神秘的汎神論的思想はこの書に至つて一つのドグマを形成している。然しこの書は予言書としての風格を未だ完全に備えるに至らず、むしろ Songs of Experience に見られる矛盾するものに対する疑惑の色が濃く示されている。Blake はこの書の序論とも云うべき The Argument で現世について次のように述べている。現世では正義の表現が激烈であり、姦悪な者が謙譲を装つている。正しき人は曾て謙譲な心をもつて人生の行路を辿り、苦難と戰つて安らかな生活を得るようになつた。然るに狡計の徒がこの平和な生活を見て正しい人の持つ柔和さを装つた。その結果正しき人は再び荒野に追われ、怒りの人とならざるを得なかつた。

即ちここでは為善の徒が天使と、正しき人が反逆者と呼ばれる。何故なら狡計の輩の支配する道徳は卑屈と奸智とを勧め、誠実と自由を排斥するものであつて、正しき人は自己の精神的潔白を保つ為に反逆者とならざるを得なかつたと云うのである。

次に人が最高の精神的な存在と融和する状態を楽園と云い、火焔は情熱或は愛の象徴となる。善悪の評価については Without Contraries is no progression. Attraction and Repulsion, Reason and Energy, Love and Hate, are necessary to Human existence. (P. 248) (対立なくては進歩はあり得ない。陽と蔭、理と力、愛と憎しみが人間的な存在に必要である。) と云い、As the plough follows words, so God reward prayers. (Proverbs of

Hell. P. 251) (鋤が言葉に従う様に、神は祈りにむくいる。)と人間が行動するには内なる神の助け即ち神の霊感が必要であると述べている。亦神を崇めるとは神の人々に賜うた才能をそれ相応に尊敬し、最も偉大な人を敬愛することである。偉人を羨み誹る者は神を憎む者である。何故なら偉人の心は神の心に外ならないからである。更に If Jesus Christ is the Greatest man, You ought to love Him in the greatest degree …… Jesus was all virtue, and act from impulse, not from rules. (A Memorable Fancy P. 260) と述べている。

次に詩人としての使命については、The ancient Poets animated all sensible object with Gods or Geniuses, calling them by the names and adorning them with the properties of woods, rivers, mountains, lakes, cities, nations, and whatever their enlarged and numerous sense could perceive. (P. 252) (昔の詩人達は万象に神々や才能をもつて生気を与え、神を呼ぶのにそれぞれの名を以つてした、即ち森河山湖…等の詩人の霊妙多感な官能が認め得た性質をもつて神々を飾つた。) と述べているが、これこそ Blake の詩人としての最も根元的な観念の一つであろうと思われる。

予言者については、予言者は公私に関して所感を公にし、事実を語るのみであつて、その点誠に正直な人間である。亦予言者は見透すことの出来る人であるとも語つている。これによつて Blake は彼自身、神を語る詩人としての使命を誇り、その所信を披瀝し、以て彼自身を予言者、彼の詩は亦予言であると云つている。

以上この書に見られる Blake の思想は蔭影と神秘性に加えて悪の意識が更に強くなつている。しかし此処に於ても愛の精神の高揚は決して失われてはいないが、それらはいずれも象徴的に示されている、此処ではもはや単一な喜びの神の姿は影を潜め、Blake が詩人として彼の Poetic Genius を尊びつつ汎神論的、神秘的な神の幻影をシンボリズムに求めて探究を続けている。

b. Milton, Jerusalem

Marriage of Heaven and Hell で象徴的で難解であつた愛の表現は Milton, Jerusalem に至ると再び明解なものになつている Milton ではサタンについては次の様な見解を持つている。世界の調和を破り分裂を齎したのは、サタンの利己主義によるものであるが、神々はサタンを憎み罰せずに、寧ろ彼を憐み、救はうとして彼の為に物質界を作つて、庇護した。この処置によりサタンは反抗者ではなく利己主義者であると述べているが、これを Paradise Lost に於る John Milton のサタンの観念に比べるとその相異に興味がある。

亦詩歌について、詩歌は天国の為にあるのではなく罪を犯し、死に慄える人間の為のもので、Blake は自ら光と美を持つて闇と悲しみのうちに融けこませる詩人とならんと云うのである、亦 The Worship of God で

In other men, and loving the greatest man best, each according

To his Genius, which is the Holy Ghost in Man: there is no other

God than that God who is the intellectual fountain of Humanity. (Jerusalem, P. 408)

と述べ Poetic Genius は永劫のものであり、凡てを守護する聖なる人間性と看做している。亦汝自身の内なる人間性を尊重せよ、それは我が精髄であるとも述べて、人間性を神聖と同一視し、Blake 自身キリストを模範としつつ詩人として生きようとしている。この点に於いて想像力は人間性と同意となり、キリストとも同意語となるのである。

次に神と人間との絆について、神は遠い神ではなく、汝の兄弟、汝の支であり、神は汝の胸のうちに住み汝は又神なる我が内に住むのである。故に我等は一体である、と次の様に述べている。

Mutual in one another's lone and wrath all renewing,

We live as One Man : for, contracting our Infinite senses,

We behold multitude; or, expanding, we behold as One,

As One Man all the Universal Family; and that One man

We call Jesus the Christ. And He in us, and we in Him,

Live in perfect harmony in Eden, the land of life,

Giving, receiving, and forgiving each other's trespasses. (The Universal Family P. 394)

亦人間性の完成に就ては自我を滅すことで、それには憎悪を捨て凡ゆるものを兄弟として愛し、他の為に自己を捧げることであると述べている。

更に Jerusalem の Divine Image では

Jesus said: 'Wouldest thou love one who never died

For thee, or ever die for one who had not died for thee?

And if God dieth not for Man, and giveth not Himself

Eternally for Man, Man could not exist; for man is love,

As God is Love : every kindness to another is a little Death

In the Divine Image; nor can Man exist but by brotherhood,' (P. 410)

と述べ人間の姿は愛と自我放却によつて与えられるものであるとの境地に到達している。ここに到り Blake の神観念は再び確固たる信念となり

Come to my arms, and nevermore
Depart; but dwell of ever here;
Cleat my spirit to Thy love;
Subdue my Spectre to Thy fear.
(Jerusalem P. 392)

（おお　救世主よ　わが腕に来り
去り給うことなく永遠に止り給え
汝の愛まで　我が心を高め
我が内なる自我を滅し給え）

と願い心の底よりキリストを求めるに至つている、ここに於いてしばしの迷いの旅路を遍歴した後で Blake の Divine Image は再び明確なものとなり、この信念は Songs of Innocence の Divine Image に通じるに至つている。

5

初期の作品で自然と精神との間に相類する生命を発見し、そこに神の姿を認めて普遍的な愛の姿に純粋な喜びを感じて詩を吟じた Blake は、彼の内に神秘性が強まるに及び象徴主義の世界に魂の平和を求めたが、満足を得ることなく魂の放浪を続けた。後、彼は完全な自我の没却と他者への愛の精神に眼覚め、その喜びを歌うことに詩人としての使命と喜びを見出し、そこに安らぎを見出し得たのである。

以上 Blake の Divine Image の思想の変転の核心を要約すれば、それは Blake 自身の持つ神秘感と詩的感性とが汎神論的、キリスト教的思想と互に混り合い、時には肯定的に又否定的に、強く弱く作用し合つたものの現れであると云えよう。Blake の描いた詩を氷山と考えるならば、此処で取り上げられた Divine Image の探究は水面に現れた氷山の一角にすぎない。その水中に没しているものは量的にも巨大なものであり、亦質的には深いもの——そこには彼の民族的凛質より来るもの、時代の環境が与えたもの——があり得ると考えられる。然しこの一考察が巨大な Blake と云う詩の氷山の征服の手がかりに成り得たならと願い、亦そうありたいとのぞんでやまないものである。(本学専任講師)

【註】使用文献

The Poetical Works of Blake : Oxford edition: 1952

参考文献

William Blake by J. Bronowski : Pelican Books

英吉利文学と詩的想像：尾島庄太郎：北星堂